

$\Lambda = \delta_1$ -Fleming-Viot過程の性質について

間野 修平 数理・推論研究系 准教授

0 本ポスターの内容

分割の要素（ブロックとよびます）が合体することで発展する分割の確率過程に Λ -coalescentとよばれるモデルがあります。合体のレートは合体するブロックの数に依存し、 $\Lambda(dx), x \in [0, 1]$ とかかれる測度に支配されます。 $\Lambda = \delta_0$ のときはKingman's coalescentとよばれ、必ず2つのブロックが合体します。陽な結果を得ることができるので、その性質は良く知られています。双対をなすFleming-Viot過程とよばれる測度値拡散過程についても良く調べられていて、定常分布であるPoisson-Dirichlet分布は良く知られています。他に解析の容易なモデルとして、 $\Lambda = \delta_1$ に対応する、すべてのブロックが一度に合体するもの考えることができます。本ポスターは、その双対をなす $\Lambda = \delta_1$ -Fleming-Viot過程の性質、特に推移確率密度について紹介しています。本内容は、Oxford大学統計学科のRobert C. Griffiths名誉教授との共同研究に基づくものです。

1 Kingman's coalescent

Kingman's coalescent (1982) は自然数の分割 $\mathcal{P}_{\mathbb{N}}$ に値をとる確率過程 $(\Pi_n(t); t \geq 0)$ で、次の規則に従います。

- $\Pi_n(0) = \{\{1\}, \{2\}, \dots, \{n\}\}$.
- 状態 $\pi = \{A_1, \dots, A_b\}$ にあるとき、ブロック A_i と A_j が合体してできる分割を π_{ij} とすると、 $\pi_{ij}, i \neq j, i, j = 1, \dots, b$ にレート1で推移。

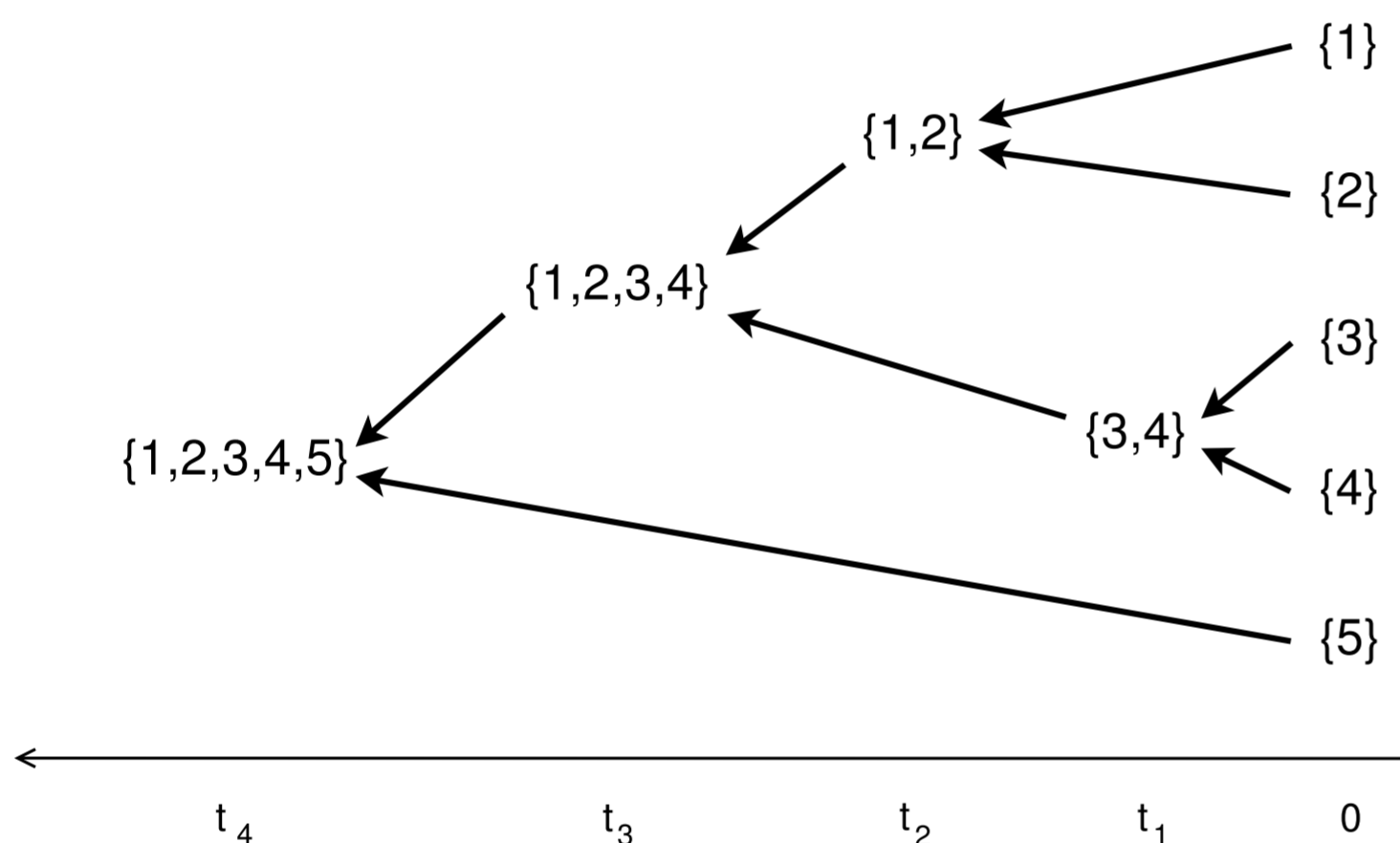


図1. $(\Pi_5(t); t \geq 0)$ の標本.

さらにブロックをレート $\theta/2$ のPoisson過程でマークすると、マークが定める同値関係により得られる分割 $\Pi_n^\theta(\infty)$ はEwens分割(1972)に従います。Ewens分割はノンパラメトリック・ベイイズにおいて良く使われるDirichlet過程からの標本で、その構成は中華料理店過程として知られています。

2 Fleming-Viot過程

Ewens分割は、Kingman's coalescentの双対をなすFleming-Viot過程とよばれる測度値拡散過程の定常分布であるPoisson-Dirichlet分布（Dirichlet分布の「無限次元版」）からの標本として導出されました。Fleming-Viot過程は確率測度 $\mathcal{P}(E), E = [0, 1]$ に値をとり、生成作用素は $\phi(\mu) = F(\langle f_1, \mu \rangle, \dots, \langle f_k, \mu \rangle)$ について

$$L\phi(\mu) = \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^k (\langle f_i f_j, \mu \rangle - \langle f_i, \mu \rangle \langle f_j, \mu \rangle) \phi_{,ij}(\mu) + \frac{\theta}{2} \sum_{i=1}^k \langle Bf_i, \mu \rangle \phi_{,i}(\mu)$$

で与えられます。浮動項が $Bf_i(x) = \int_E (f_i(y) - f_i(x)) dy$ のときに定常分布としてPoisson-Dirichlet分布をもちますが、ここでは陽な表示に興味があるため、最も単純な2次元の分布を考えるために、 $f_1 = I_A, Bf_1(x) = 1 - 2f_1(x)$ とします。すると、 $\mu(A) = x$ について

$$L = \frac{x(1-x)}{2} \frac{d^2}{dx^2} + \frac{\theta}{2} (1-2x) \frac{d}{dx}$$

となります。定常分布 π はベータ分布 $Beta(\theta, \theta)$ で、推移確率密度は

$$f(x, y; t) = \pi(y) \left\{ 1 + \sum_{n=1}^{\infty} e^{-\frac{n(n-1+2\theta)}{2}t} P_n^{(\theta, \theta)}(x) P_n^{(\theta, \theta)}(y) \right\},$$

のような表示をもちます。ここで、 $P_n^{(\theta, \theta)}(x)$ は $Beta(\theta, \theta)$ を重みとする直交多項式（Jacobi多項式）で、 $\mathbb{E}_\pi[P_m^{(\theta, \theta)}(X) P_n^{(\theta, \theta)}(X)] = \delta_{m,n}$ を満たします。

3 Λ -coalescentと Λ -Fleming-Viot過程

Λ -coalescent (Pitman 1999; Sagitov 1999) は、Kingman's coalescent における推移の規則を次のように変更したものです。

- 状態 $\pi = \{A_1, \dots, A_b\}$ にあるとき、 k 個のブロックがレート

$$\lambda_{b,k} = \int_0^1 x^{k-2} (1-x)^{b-k} \Lambda(dx), \quad 2 \leq k \leq b$$

で合体。交換可能性より $\lambda_{b,k} = \lambda_{b+1,k} + \lambda_{b+1,k+1}$ 。

例

- $\Lambda = \delta_0 \cdots$ Kingman's coalescent.
- $\Lambda(dx) \propto x^{1-\alpha} (1-x)^{\alpha-1} dx, \alpha \in (0, 2) \cdots$ Beta coalescent. ($\alpha = 1$ はBolthausen-Sznitman's coalescentとよばれる)

Λ -coalescentの双対をなす Λ -Fleming-Viot過程の生成作用素は跳躍を伴い、2次元の分布については、

$$Lf = \Lambda(\{0\}) \frac{x(1-x)}{2} \frac{d^2 f}{dx^2} + \frac{\theta}{2} (1-2x) \frac{df}{dx} + \int_{(0,1]} (xf((1-r)x) + r) + (1-x)f((1-r)x) - f(x) \frac{\Lambda(dr)}{r^2}$$

となります。

4 $\Lambda = \delta_1$ -Fleming-Viot過程

$\Lambda = \delta_1$ -coalescentは $\lambda_{b,b} = 1$ という単純なモデルです。その双対をなす純粋跳躍過程である $\Lambda = \delta_1$ -Fleming-Viot過程の性質を調べました。ここでは推移確率密度に関する結果のみを紹介し、定常分布は

$$\pi(x) = \frac{2^\theta}{\theta} |x - 1/2|^{\frac{2}{\theta}-1}, \quad 0 \leq x \leq 1, x \neq \frac{1}{2}$$

で、推移確率密度は

$$f(x, y; t) = \pi(y) \left\{ 1 + \sum_{n=1}^{\infty} e^{-\lambda_n t} P_n(x) Q_n(y) \right\}$$

のような一般化多項式による表示をもちます。ここで、 $\lambda_1 = \theta/2$,

$$P_1(x) = x - 1/2, \quad Q_1(x) = (x - 1/2)^{-1},$$

さらに、 $j = 2, 3, \dots$ について、 $\lambda_j = 1 + j\theta/2$,

$$P_j(x) = (x - 1/2)^j + \frac{((-1)^j - 1)x - 1}{2j + \theta(j-1)2^{j-1}},$$

$$\pi(x) Q_j(x) = \delta^{(j)}(x - 1/2).$$

ただし、 $\delta^{(j)}(x)$ は超函数で、 $\delta^{(j)}(x) = [(2\pi \sqrt{-1} x^{j+1})^{-1}]$ 。これらは $\pi(x)$ を重みとする双直交性 $\mathbb{E}_\pi[P_m(X) Q_n(X)] = \delta_{m,n}$ を満たします。